



「縦糸」と「横糸」が織りなす 自由に先端的な学び・研究を展開。 予想しなかった自分と出会う学生時代を



くまのこう かつし
熊ノ郷淳総長

1997年大阪大学大学院医学研究科博士課程内科系専攻修了(医学博士)。専門
は内科学、免疫学。2025年4月より現職。
日本免疫学会等の理事などを務める。

SUMMARY

人文学・社会科学系から理工学、医歯薬系まで全11学部23学科を擁する大阪大学。学部学生数は国公立大学で最多を誇り、大学院も15研究科45専攻を擁する国内屈指の研究型総合大学です。その源流にあるのが、1838年に蘭学者・緒方洪庵が開いた「適塾」です。福沢諭吉をはじめ、多くの人材を輩出した適塾の「自由闊達」の精神は、現在も大阪大学の教育・研究の根幹をなし、学問分野の枠を越えた挑戦を促す風土のもと、「実学の阪大」の名にふさわしい革新的な知や技術が次々と生み出されています。

世界最高水準の教育研究拠点を目指し、教育・研究・社会共創を推進する大阪大学の取り組みについて、熊ノ郷淳総長に語っていただきました。

01 専門性と学際性の融合で 新たな価値を創造する

1931年に創設され、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとして多くの社会課題に取り組んできた大阪大学。その理念を象徴する出来事の一つとして熊ノ郷淳総長が挙げるのが、1970年に開催された日本万国博覧会（大阪万博）です。国を挙げての一大イベントとあって、会期中は日本中から来場者が予想され、会場であった千里丘陵地域の交通機関は大混雑が懸念されました。

「このとき、駅の混雑対策として本学の研究者が鉄道会社や設備メーカーなどと共同で開発したのが、自動改札機です。今や自動改札機は世界で利用されています。本学が近隣地域の社会課題に取り組んだ成果は、世界へと羽ばたいていったのです」（熊ノ郷総長、以下同）

熊ノ郷総長は大阪大学の目指す姿として、専門領域の深化と学際的な視野による新たな価値創造を挙げます。専門領域を「縦糸」、分野横断的な広がりをもつ「横糸」とすると、両者が調和をもつて紡がれることが重要なのです。

「本学は『実学の阪大』と称されています。研究内容の多くが学内にとどまらず、社会実装につながっているのです。そのため、市民自治体、国内外の機関、企業など社会との連携が非常に重要なのです」

02 学部の枠を超えた教育で 「出会い」を後押しする

大阪大学の教育を特徴付けるプログラムの一つが、1年生全員が受講する「学問への扉（愛称…マチカネゼミ）」です。少人数のゼミ形式で行われ、「ビブリオバトル入門」や「わたしたちの暮らしと放射線（QB）」です。Q・R・Bでは情報から生命、さらにその先まで広がる量子の可能性を開拓し、社会課題解決への貢献が期待されています。日本初となる純国産量子コンピュータを完成させ「2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）」で企画展を開催しました。

学際的な取り組みを象徴する存在の一つが社会技術共創研究センター（ELSIセンター）です。ELSIセンターは、新たな科学技術が社会に浸透する際に起こり得る、倫理的・法的・社会的な課題に対して学問分野を超えて総合的に取り組む組織です。株式会社メルカリと共に立ち上げたメルカリR4ドラボ・大阪大学協働研究所では、企業活動を対象として領域を超えた研究を行い、人文社会科学の知見を社会実装することを目指します。

熊ノ郷総長は他にも、注目してほしい研究拠点として、免疫学フロンティア研究センター、ヒューマン・メタバース疾患研究拠点、感染症総合教育研究拠点、阪大ふくふくセンターなどを挙げます。

04 自由闊達な校風が 社会が求める総合力を養う

研究のさらなる推進や教育の充実を図る上で、学生を受け入れる「窓口」でもある入試制度の改革や在学生への支援の拡充は欠かせません。すでに大阪大学では、学部から博士課程まで入学金や授業料を免除する制度を整備しています。さらに近年、DE&R（ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン）推進の観点からも、女性研究者比率が低い分野の戦略的な分野拡大を目指し注力しているのが、女性理系人材の育成です。

大阪大学は令和8年度入学生の入試から、基礎工学部における学校推薦型選抜で「女性枠」

「線」など多彩なテーマを用意。学部・学科の垣根を越え、興味に応じて自由に受講できます。また、大阪大学は国立の総合大学で唯一、外国語学部を持つ大学です。その特色を生かした「マルチリンガル・エキスパート養成プログラム」では、外国語学部と他学部の専門教育を横断的に学べる環境を用意。グローバルな課題の解決に挑む人材の育成を目指しています。例えば、外国語学部の学生が工学部のプログラムを受講したり、法学部の学生が外国語学部の多様な言語を学んだり、学部の枠を超えた学びの機会を提供しています。

熊ノ郷総長は、学生生活を送るうえで、他学部の学生や教員と交流することは非常に重要だと指摘します。大阪大学の「精神的源流」である適塾は緒方洪庵が開いた蘭学塾ですが、教育者や思想家、政治家など、医学以外にも多彩な分野で活躍することになる人材が集まりました。その精神が現代に受け継がれているのです。

「千日の勤学より一日の学匠」という言葉があります。千日にわたって独学するより、一流の先生とのたった1日の出会いがその後の運命を変えることがあるという意味です。今の時代は、知識を得ることだけでなくネットでもできますが、それでは縦糸だけになってしまいませんか。横糸は出会いによって生まれます。先生や仲間と出会い、対話して新たな考えを学ぶ。これが横糸を紡ぐことであり、大学という場所が持つ意義でもあります」

03 世界水準の研究が随所に。 「実学の阪大」が加速する

ある先端的・世界的な研究やユニークな取り組みのなかでも、国際的に大きな注目を集めているのが、大阪大学の量子情報・量子生命研究センター（Q-

20人分を設けました。同枠への出願者は、一般枠との併願も可能。多様な人材が集まり、従来以上に教育や研究が活性化することが期待されています。このほかにも理学部、工学部、基礎工学部に入学した優秀な女子学生50人に対して、「入学支援金」を支給する制度を導入しています。大学院生では優れた研究成果を挙げた女子大学院生を対象として、「大阪大学女子大学院生優秀研究賞」を設けています。

大阪大学は女子学生数、女性教員数ともに日本の国立大学で最多を誇ります。熊ノ郷総長は「本学は、女性にとつてのロールモデルが、大学と言えます。学部生、大学院生、教員と、立場を超えて研究を志す女性が交流できる場も豊富に設けています。若い世代がロールモデルと出会って後には、数年後には自らも後進に對するロールモデルになるという好循環を起こしていきたい」と、今後の展望を語ります。

最後に熊ノ郷総長に、大阪大学で学ぶ意義と受験生への期待を語っていただきました。

「社会で問われるのは総合力であり、その力を養うには、分野を超えた体験が不可欠です。自由闊達さを伝統であり特色とする本学は、垣根を取り払った学びや出会いを経験し、総合力を身につけるにはぴったりの環境と言えます。大学進学時には、将来をある程度イメージして学部や学科を選ぶでしょう。しかしその選択は、必ずしも大学卒業後の進路と一致していかなくてもかまいません。大学でのさまざまな出会いを通して新たな夢や目標を見つけ、入学したときは考えていなかったような道に進んでもかまわないのです。本学ではみなさんに、『予想もなかったような自分』になってもらいたい。それが総合大学である本学の役割であり、魅力なのです」

大学HP



大阪大学

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
教育・学生支援部入試課 TEL 06-6879-7096
https://www.osaka-u.ac.jp/ja

PICK UP 大阪大学の教育体系

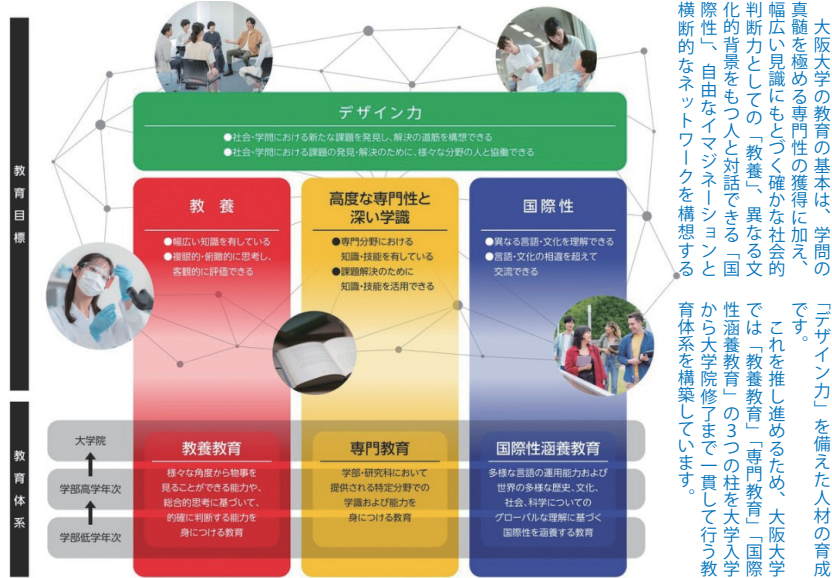
■ 大阪大学の注目の研究拠点

○免疫学フロンティア研究センター (IFReC)：文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI)」により設置された世界的な免疫学の研究拠点。ノーベル賞を受賞した坂口志文特別栄誉教授が在籍。ヒト免疫学を通じて、感染症、自己免疫疾患、がんなどの免疫が関与する重要疾患の治療法開発を目指した基礎研究を推進している。

○ヒューマン・メタバース疾患研究拠点 (PRIME)：iPS細胞由来のオルガノイド（ミニ臓器）を用い、情報学を活用しながら、人類の夢とも言える「すべての病気の克服」に挑む。

○感染症総合教育研究拠点 (CIDER)：感染症の脅威から「いのち」と「くらし」を守るための総合知の形成を目指す。社会学や心理学、行動経済学などの専門家が研究に参画している。

○阪大ふくふくセンター：外国にルーツを持つ子どもが自身のルーツに誇りを持ち、母語・母文化を大切にしながら生きられる環境づくりに取り組む。地域社会と連携し、誰もが「複言語・複文化」を社会の豊かさとして生かせる社会づくりを目指す。



大阪大学の教育の基本は、学問の真髄を極める専門性の獲得に加え、幅広い見識にもとづく確かな社会的判断力としての「教養」、異なる文化的背景をもつ人と対話できる「国際性」、自由なイマジネーションと横断的なネットワークを構想する「デザイン力」を備えた人材の育成です。

これを推し進めるため、大阪大学では「教養教育」「専門教育」「国際性涵養教育」の3つの柱を大学入時から大学院修了まで一貫して行う教育体系を構築しています。